太陽と月と踊る舞姫

黎奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
太陽と月と踊る舞姫

【Ｎコード】
Ｎ２０８７Ｎ

【作者名】
黎奈

【あらすじ】
太陽華王国の姫君である由菜の舞は誰もが魅了されるものだった。しかしいつからか、舞を禁じられてしまいため息をする日が続く。ため息をする由菜のため、誕生日の祝いは盛大に行われた。誕生日に従兄妹に当たる彪夜と拍が来てくれてはしゃいだ由菜だが、拍がある事件を起こし・・！？
恋愛も混ぜたファンタジーをお送りしようと思います。

第一話　満月の夜に　（前編）

太陽が爛々と輝く中、一人の少女は舞い踊り人々を魅了する。
少女は太陽華王国の姫君という身分ということも会って人々に慕われていた。

だが、少女は毎日ため息をついている。
今日もその日の中の一日だった。

「はぁー」

少女は屋敷にある庭を見ながら今日もため息を吐く。

「由菜、またため息を吐いているのか？」

少女は声をかけられ振り向く。

そう、少女の名は由菜。
太陽華王国の姫君。

由菜は声をかけてきた少年を見てぱっと顔を輝かせた。

「彪夜、来てくれたのね。会うのが待ち遠しかったのよ。」

そう言って少年に微笑む。

少年の名は彪夜。
由菜の幼馴染であり、従兄妹でもある。

「これ・・」
彪夜が何か私の手のひらに置いた。
それは包装紙できれいに包まれている箱だった。
「え・・」
戸惑う由菜に恥ずかしそうに彪夜が
「由菜、今日誕生日だろ？だ、だからこれは・・その・・・・」
と、くぐもった声で言う。
プレゼント？
普段無口で無表情な彪夜が、私に？
由菜は驚いた。
由菜は戸惑いながらも
「彪夜、開けてもいい？」
と、聞いてみた。
「あ、あぁ。・・気に入るといいが・・」
とても不安そうに言う彪夜。
私は包みを丁寧に開けた。
中に入っていたのは・・かんざし。

由菜は思わず、

「きれい・・」

と呟いてしまった。

「いろいろと悩んだんだが、それが一番いいだろうと思ったんだ。気に入らなかったか？」

戸惑いながらぶつぶつ言い訳のように呟く彪夜。

言い訳のようにしか聞こえない彪夜の言葉は由菜にとってすごくうれしいものだった。

彪夜が・・私のために・・悩んでくれて、買ってくれたんだ。

彪夜が・・・。

うれしい。

「ありがとう、彪夜。うれしいよ。でも、こんなかわいいかんざし、私に似合うかな？」

うれしさのあまりに言った私だが、簪が自分に似合うかどうかが不安でたまらなかった。

「に・・あう・・」

恥ずかしそうに言う彪夜。

「ほんとに？」

「あぁ。」

彪夜の言葉に由菜は顔を明るくさせ、うれしさが混じりながらもも
う一度聞く。
そして、彪夜が顔を赤くさせでもしっかりと頷く。

「じゃぁ、この簪、今日の祝いの席につけてくね。だから、お願い
していい？」

由菜はうれしさを隠せないまま上目遣いで彪夜を見上げた。
頭一つ分背が高い彪夜は見上げないと視線が合わない。

彪夜は上目遣いで見上げる由菜に戸惑いながら、

「な、なにを？」

と、聞く。

由菜は少し顔を伏せ、

「簪・・挿してもらいたいの・・」

という。

「俺なんかで・・いいのか？」

戸惑いながら問う彪夜に、

「彪夜がいいの。それに彪夜からのプレゼントなんだし。」

と、由菜は頬を赤く染めてそれでいてはっきり言った。

「あ、あぁ。」

彪夜は目を見開いたが、軽く頷いて由菜を促す。

由菜は簪を渡した。

簪を渡された彪夜は由菜の髪に挿した。

由菜の髪は簪によって輝きだしたかのようによりいっそうきれいに見えた。

「ありがとう、彪夜。」

由菜は恥ずかしそうに微笑んだ。

彪夜が何か言おうとしたとき、

「あっ、いたいた。探したよ、由菜に彪夜！」

という、二人を呼ぶ声がした。

声の持ち主は・・・

「拍っ。来てたのね。」

「・・・。」

由菜は顔を輝かせたが、彪夜は由菜とは逆に顔を曇らせる。

「探しましたよ。由菜、修羅（シュラ）様と星零（セイレイ）様が来るようにって言ってま

したよ。」

拍が　探すの大変でしたよー　とでも言いたいような話し方でいう。

拍も彪夜と同じ従兄妹に当たる。

太陽華王国の隣国、月光華王国の王大使に当たる身分の高い貴族。

私は話していて楽しいけれど、彪夜とはあまり仲が良くないみたい。

「お父様とお母様が？そういえば、私を祝いたいって言ってたわ。ありがとう、拍。」

「あ、待って、由菜」

私が拍にお礼を言ってお父様たちの元へ行こうとしたとき、拍が呼び止めた。

「え、なに？拍。」

思わず立ち止まって振り返る。

「これ、僕からのプレゼントです。」

そう言って拍は私の手に渡してきた。

扇子？

「わぁ、ありがとう。ねぇ、開いてもいい？」

思わず聞と、

「もちろんですよ。あなたのために買ってきたんですから。」
と、拍はうれしそうに微笑む。
私は扇子を開いた。
「わぁ、きれいね。」
「でしょう？一目見て、由菜に似合うと思ったんですよ。」
「ありがとう。じゃぁ、行ってくるね。」
「いってらっしゃ～い。」
私はお礼を言って、お父様の元へと向かった。
お父様たちは私のためにわざわざ祝ってくれた。
「誕生日おめでとう、由菜。もう１６歳になったんだね。」
お父様・・
「誕生日おめでとう、由菜。早いわね、もうこんなに大きくなって・・うれしいわ。」
お母様・・・
お父様もお母様も大好き、ありがとう。
「ありがとう、お父様、お母様。私のために・・ありがとう。」

きっと、わたしの願いを・・舞うことの代わりとして開いてくれたんだわ。
気を遣わしちゃった、お父様とお母様に。
でも・・それでも・・舞は・・踊りは・・やめられない。

祝いの席では拍や彪夜もいたけれど、私は、心から楽しむことができなかった。

祝いが終わったその夜、

お父様とお母様に舞うことをやめることなんてできないっ

と言いに行こうと、お父様とお母様のいる部屋に向かった。

あれ？部屋の周りに誰もいない・・
おかしいな。普通なら護衛がいるはずなのに。

不思議に思いながら部屋の中に入った。
部屋の中は暗い。
中に入ってみたものは・・・・

ぐさっ

と、剣がお父様の体に刺す瞬間。
お母様も倒れている。
ばたっとお父様が倒れる。
周りは赤く血で染まる。

え・・何が起こったの？

暗くて誰がお父様をやったのかは分からない。
ただ一瞬だけはっきり明るく見えた。
は・・く・・？
そう。一瞬、拍の姿が・・赤く濡れた剣を持つ姿が・・見えた。
嘘だよね？
嘘といってよ、ねぇ拍。
「いたんですか、由菜姫。」
「拍？拍がやったの？お父様もお母様も。」
「ええ。そうですよ。」
「な、んで？」
「僕の父と母は修羅様と星零様が殺めたんです。敵という奴ですよ、一般的にいうと。」
拍が・・本当に？
でも違うよね、今の拍は別人だもんね。
本当に・・違うよね。
私の頬に何かが伝うのを感じた。
涙。
私は今泣いている。
なんで？

お父様とお母様がなくなったから？
いや、ちがう。
拍のせいでお父様とお母様がなくなったからだ。
私は足に力が入らなくなってその場に座り込んでしまった。
逃げなきゃいけないのに。
お父様とお母様を殺めた拍から離れなきゃ。
なのにどうして動けないの？
立って、逃げなきゃ。
「拍様、ここにおられましたか。手はずは整いました。
あれ？由菜姫に見られてしまったのですか？でしたら姫もこのお二人の元へ送ってしまいましょう。」
拍の護衛の人が来て、言う。
殺される！私もお父様たちと同じようにっ。
私は立ち上がった。
そして部屋の入り口に走る。
でもつかまった。
必死にもがいた。
「放してッ！」
私は叫ぶと共に、相手の腕をつかむ自分の手に力を込めた。
「あつっ！！」

一瞬、護衛の人は自分をつかむ腕を緩めた。
その隙を狙って逃げる。

私は太陽の力を継承する者。

その力は人々に気力を与え、生命力を与える。
時には熱となって人を襲う。

凶器にもなるこの力を使うなんて私はしたくなかった。
でも、もうそんなことといってられない。

必死に走って逃げる。

どこか遠くに。
拍からもっともっと遠くに。

怖い。早くここから・・この屋敷から・・

そう思って走った。でもそのときふと彪夜のことが頭によぎった。

彪夜は・・彪夜は無事なの！？

彪夜、彪夜、彪夜っ！

心の中で何度も叫んだ。

走って探し回った。
でも、今は夜。
暗くて見えないし、力もどんどん吸い取られていくように失ってい

く。

そういえば、今日は満月。

太陽の力は月に・・特に満月には弱い。

そうか、拍は月の力の持ち主だからこの日(まんげつ)を狙って・・

もう体に・・力が・・・

体が限界でちょうど道を曲がったところで崩れていく体を誰かに支えらた。

第一話　満月の夜に　（後編）

「由菜っ。何でこんな夜にうろついているんだっ。今日は満月だぞ。なのに・・・由菜？」

私を呼び捨ての挙句に怒鳴りつける。
そんな人、私の中で知っている人は一人しかいない。
それは彪夜だ。

崩れていこうとする体を支えてくれたのも声をかけてくれたのも全ては彪夜のおかげ。

彪夜はきっと私がが泣いていることに驚いている。

「彪夜、わ、私っ、ーーー」

「彪夜、由菜をこちらに渡してもらえないかな？」

私の声と誰かの声が重なる。

い、いやっ。来ないで・・怖い。あなたが・・

私はその誰かを見上げた。
それは拍。
護衛を・・兵士をたくさんつれた怖い拍。

拍を見て怯えている私を見て彪夜が

「拍、か？由菜をお前なんかに？

由菜だってお前を見て怯えている。お前に渡す理由などない。」

と、威嚇するように言う。

そう言ってから、再び、

「拍、お前に聞く。修羅様はどうした？」

彪夜が威嚇とは程遠い声を出す。

修羅・・

その声を聞いて私は悲しくて涙をいっそう流した。

お父様・・・

「先ほど、僕があの世に送って差し上げたんだよ。」

「！？」

拍の声に彪夜の顔色が豹変する。

私はそれを平然と言う拍を見て涙があふれた。

拍・・それ以上言わないで・・もう聞きたくない。聞きたくなんかない・・

「おまえが、か！？お前のような奴がなぜ？」

「敵討ちだよ。それとこの国の玉座がほしかったからね。」

「お前は地位に執着するような奴だったか？少なくとも俺の知ってるお前はそんな奴じゃーーー」

「君たちの知ってる僕はもともといないのさ。これが今の僕。この国は弱い。
月には勝てない太陽だが、月にないものがある。
それを使わなかった修羅様たちが悪いんですよ。
修羅様たちの行っていたものは大臣たちの・・貴族たちの不満をためました。
太陽の力を使わずしてこの国はどうやって栄える？
これでは宝の持ち腐れではないですか。
だから、僕の手によって変えるんです。」

彪夜の声をさえぎって淡々と述べる拍。

私の心の叫びは拍には届かなかった。

「だから由菜姫を渡してくださいな、あなたなら、分かるでしょう？」

拍の声が彪夜を揺さぶってるのが分かる。

彪夜・・私はもう・・

「・・渡さない・・」

小さく彪夜が言う。

「ん？」

拍が聞き返すように首をかしげる。

「お前なんかに由菜を・・由菜姫を渡さないって言っているんだよ。」

彪夜が怒りに満ちた声で言う。

彪夜。あなたは私を・・・

涙は一瞬にしてとまった。

「さて困りましたね。姫を渡してもらわないと困るのですが。あなたはそういった手前でどうするんですか？」

「やりあうに決まってるだろ？それしかない。もとよりそっちはそのつもりなんだろ？」

拍が聞いて彪夜が挑戦的な言い方で言い返す。

「ええ。そうです。さぁ、兵士たち、この者たちを捕まえてください。」

拍の声に兵士たちは動く。

彪夜は片手に槍、そしてもう片方の腕で私を抱えた。

ぐらぁ～

視界が歪むが何とか意識は取り持っている。

兵士たちが彪夜を取り囲むが彪夜はあっさり槍で吹き飛ばして突破口を広げる。

そこに向かって走った。

「追ってください。」

後方から拍の声が聞こえる。

だが、その声はどんどん遠くなるばかり。

走るのがとても速い彪夜だからか追ってくる足音はどんどん小さくなっていく。

追っ手を撒いたと思ったとき、彪夜は私を下ろした。

そこは身を潜めやすい山の中。

「由菜・・本当に修羅様たちは・・・」

私に聞こうと口を開く彪夜。

「彪・・夜・・あなたは私の・・味方？」

私がぼやける視界の中で彪夜だけを捕らえながら言う。

「修羅様に・・お前のこと・・託されているからな。」

彪夜がなぜか悲しそうに言う。

どうしてそんな悲しそうに言うの？彪夜・・

「・・お父様も・・お母様も・・拍が・・殺ったの・・

私は・・それを・・見てることしかできなくて・・私は・・」

言葉を口からつむぎだすにつれて涙があふれてきた。

「もう・・泣くな・・」

そう言って私の涙を拭ってくれる彪夜の手が震えているのが頬に手が触れて感じた。

彪夜・・あなたも・・信じられないんだよね・・？

＜ピー＜ピー＜

私の耳に何か聞こえた感じがして思わず立ち上がった。

「由菜！？」

彪夜もそれには驚いて立ち上がる。

でも聞こえていないみたい。

立ち上がると不意に視界が歪んだ。

「おいっ！・・・今日は満月だ。動かないほうがいい。

体に負担がかかる。月光はお前には毒だ。」

彪夜は私の体を支えて言った。

そうか・・満月に・・月光。
私の体に毒だから・・
こんなにも・・体が夜に抜け出すことを拒絶していたんだね・・・
そして月を見ることも・・

私の意識は徐々に遠のいていった。

「由菜、もう休め。夜はお前にとってーーーー」

彪夜の言葉が終わらぬうちに私は気を失った。

第二話　出会い　（過去編）

私は夢を見ていた。

過去の夢を・・・

「お母様、お父様・・」

私はそういってお母様たちの部屋に尋ねにいった。

〔幼い頃の私・・・〕

お母様たちは二人で話している。

（お母様たちいつも二人で話してる・・私を相手にしてくれない・・・）

私は、ぐっと唇をかみ締めた。

部屋の扉を空けてもお母様たちは私のことを気にしてくれない。

〔あのときの・・辛い過去・・〕

私は部屋から出て行った。

（いつもいつも私の相手をしてくれない。・・お母様たちなんて・・・）

幼い私は心の中でそう思う。
幼い私はとぼとぼ廊下を歩く。
涙をこらえながら。

〔このとき私は・・おかあさまたちが羨ましかった。話せる相手がいることを。
そしてそれと同時に何で私と話してくれないのかと悲しんだ。
〕

廊下を歩いていた幼い私に侍従が来た。

「由菜様、お客様でございます。」

優しい口調で言う。

「私に？お母様たちじゃなくて？」

幼い私は聞き返した。

（私に？誰が来たの？）

「そうです。由菜様に、です。ここにお呼びしてもいいですか？」

侍従は自分の名を強調した。

「由菜様？」

侍従は戸惑った。

〔無理もない。

幼い私は泣いているのだから。」
幼い私は泣いていることにようやく気づいた。
そしてうつむきながら涙を流す。
（何で・・こんなにうれしいの・・？何で・・涙が・・・）
「ひっく、ひっく。」
直に幼い私はひゃっくりをあげだした。
「俺・・来ちゃだめだったか？」
その声に幼い私は顔を上げた。
幼い私と侍従のいる廊下に突如現れた少年が不安そうに声をかけた。
「あっ、彪夜様、勝手に来ちゃだめじゃないですかっ。待っているように言ったのに。
申し訳ありません、由菜様。」
「俺・・来ちゃだめだったか？」
幼い私に再び少年は不安そうに聞いてくる。
泣いている私と、突然少年が来たことで侍従はおろおろしっぱなしだった。
（誰・・？）

幼い自分より頭一個分ぐらい背が高い少年は自分を覗き込んできた。

フルフル

幼い自分は横に首を振った。

そのしぐさを見て少年は安心したようだった。

「良かった。首を縦に振られたら俺・・どうしようかと・・・じゃぁ何で泣いてるんだ？」

幼い私はじっと少年を見つめた。

（うれしいのに・・・なんで泣いてるの・・？）

「・・・・」

何も言わない幼い私に少年は

「泣くな。お前は笑っているほうがいい。」

と言って幼い私の涙をぬぐう。

「え・・？」

かすれた幼い私の声。

（私のこと・・知ってるのかな？）

少年はじっと見続ける幼い私を不思議に思って、でも納得したのか

「俺は彪夜。お前の名前は？」

と、名乗って聞く。

〔知ってきたはずの彪夜なのに、このとき、何で聞いたのか、後々気になってんだっけ・・〕

「・・由菜。」

幼い私は言った。

「由菜・・よろしくな。」

目の前にいる少年・・いや、彪夜が言う。

「うん。」

このとき、幼い私は笑った。

（私のところに来てくれた。・・お母様たちじゃなくて・・自分に・・・）

幼い私はそのことがうれしくて笑った。

「やっと笑ったな。」

彪夜もつられて笑う。

「あのー忘れてませんか？私の存在を。」

このとき侍従がようやく声を出した。
幼い私も彪夜も侍従の方を振り返る。
「ごめん。忘れてた。」
「やっぱり、忘れてたんですね。所詮、侍従なんてそんなものですよ・・・」
彪夜の言葉にすねたように言う侍従。
「俺、由菜と庭を散歩してもいいか？」
「いいですよ。修羅様たちには蓮（れん）様と蝶々《ちょうちょう》様がご挨拶に行っていますし。」
彪夜の言葉に許しを出す侍従。
「じゃあ行ってくる。行こう、由菜。」
「う、うん。」
彪夜に手を引かれ、手をつないで庭に向かう。
（お母様たちに挨拶もなしでいいのかな・・？）
そして幼い私と彪夜は庭の中を歩き出した。
「ねぇ、いいの？」

思い切って幼い私は聞く。

「ん？挨拶のこと気にしてるのか？」

「だって・・お母様とお父様に用があったから来たんでしょ？」

「俺のお父様たちは、な。俺は違う。従兄妹に会いに来たんだ。」

「従兄妹・・私のこと？」

「そうだ。他に誰がいる？」

「拍・・とか。」

幼い私が拍の名を出すと機嫌悪そうに

「あいつには会いたくない。」

そういって、私の手を強く握る。

〔思い出した・・このときから彪夜は拍のことを嫌っていたんだ。〕

この後、彪夜との散歩が終わって屋敷に戻ると拍がいた。

にぎやかになったが、やっぱり彪夜の機嫌が悪かった。

そのとき幼かった私は疑問に思った。

今もわかりっこないから幼かった私にも分かるはずがない。

〔彪夜に出会った頃、彪夜は明るい性格だったが両親をなくすと共に口数が少なくなった。
彪夜自身、両親のことを嫌っていたがやはり失われたことは悲しかっただろう。

両親が亡くなった当時、ずぅーと落ち込んでいた彪夜のために私は舞を練習した。
それは私が舞う姿を見る彪夜はそのときだけ笑顔を見せていたからだった。

きっかけは彪夜のためだったけど今は違う。
舞は好きだし、もっと人々を喜ばせたいと思っている。〕

私はふと目がさめた。

「起きたか？」

視界には彪夜の姿が目に入る。

「うん・・眩しい・・」

そういって太陽を見上げる。

日光を浴びた私はなんだか心地よかった。

暖かい・・・力が注がれているような気がする・・

「あぁ。」

彪夜も眩しそうに見上げる。

「これからどうする？」

彪夜が真剣に聞く。

「・・とりあえず、国を出たほうがいいかもしれない。追っ手が来る。」

「どこへ行く？」

「龍蓮（りゅうれん）様のいる国・・私のおじい様のいる修練（しゅうれん）華王国に・・」

おじい様なら何とかしてくださるかもしれない。

それだけが頼りだった。

「どの国よりも武力の勝る国か。だが、行くには月光華王国を通るしかない。」

「うん。それは覚悟の上。」

「食費とかどうするつもりだ？この山なら困らないだろうが・・町へ降りるとなると・・」

「私が舞って稼ぐ。」

「え？」

「彪夜は何か得意なことないの？」

「っ・・・」

彪夜は私から目をそらす。
顔が赤い。

こういうときの彪夜は　思い当たったけど、とてもじゃないが言えない　って言う証拠。

彪夜の得意なこと・・・

「あっ、そういえば、楽器っ。彪夜、楽器弾けたよね？」

「！」

思い当たったことを私は言った。

彪夜は驚く。

なぜ当てたんだ！？

とでもいう風な感じで。

「黙ってないで答えてよ。弾けるの？弾けないの？」

「・・上手くはない」

「じゃあ、決定ね。私が舞で彪夜が楽器。うん。これでばっちり。

食料は山でためましょ？」

「俺、楽器なんて・・・」

「彪夜は楽器・・上手よ？人の心を揺さぶるくらい・・」

私は目を伏せていった。

本当に彪夜は上手だった。

以前聞いたとき、涙が出るくらい・・・

本人は過小評価してるけど。

「・・・・」

彪夜は黙ってしまった。

「とにかく・・自信もってね？ほんとに上手なんだからね？分かった？」

彪夜に押し付けるように明るく言う。

私が沈んだ気持ちになるから彪夜も黙るんだ。

無理にでも明るく振舞わなきゃ。

「あ、あぁ。」

「彪夜まで巻き込んじゃったね。・・本当にごめんね・・私の問題なのに・・」

私は目を伏せて彪夜に謝った。

私だけが追われるならまだしも、彪夜までもが・・ごめんね、彪夜。

「・・お前のせいじゃない。あいつが悪いんだ・・それに俺はこの場にいることを望んでいる・・」

最後のほうが私にはうまく聞き取れなかった。

望んでる?何を?

「彪、夜?」

戸惑う私に気づいてか

「何でもない。とにかく、お前は悪くない。由菜、歩けるようだったら、もう行かないとヤバイ。追っ手が来てる」

と言った。

追っ手・・・

「うん。」

私は頷いて立ち上がった。

そのとき　ふらっと　バランスを崩した。

「おいっ」

「大丈夫・・」

バランスの崩れた体を彪夜が支えた。
私は何とか言葉をつむぎだした。

彪夜の支えがあって立てるようになると

「無理はするな。ゆっくりでいい。」

と、彪夜は優しく言う。

「ありがとう、彪夜。でも急いだほうがいい。だから、行こ?」

「あぁ。本当に無理するなよ?」

「たぶん。」

「たぶんはなし、だ。」

「あはは・・ごめん。しないよ。」

「ならいい。」

そして私と彪夜は歩き出した。

第二話　出会い　（過去編）（後書き）

〔　〕は夢を見ている由菜の気持ちです。
（　）は幼い由菜の気持ちです。
誤字脱字・・抜けている字などあったらいってください。
まだ不慣れですので・・・
これからもがんばります。

第三話　月光華王国の姫

私と彪夜は今、月光華王国に侵入することに無事成功した。
幸い、太陽華王国と月光華王国の境にある町にはまだ私のことが知られていなくて
そこでいろいろとお世話になっちゃったんだ。
月光華王国は旅人や舞台劇などがたくさんあるから
名前さえ言わなければその人たちにまぎれることはたやすかった。
宿に泊まるわけにもいかず野宿になるが問題はそれど頃ではなく
どうやって路銀を稼ぐか・・どうやって楽器を購入するか・・
という深刻な問題に頭を悩ませていた。
夜、月光華王国の町の中にある林の中に身を隠し彪夜と眠れぬ夜をすごしていた。
「眠れないのか？」
隣で木を背もたれにしている彪夜が問う。
「う・・ん・・」
私は頷きながら夜空に輝く半月を見上げる。
頷いた後、突然視界を彪夜の手によってふさがれた。
「！？・っ・・・こっ怖いっ・・」

いきなりのことだったから思わず呟いてしまう。
いきなりふさがれて視界が突然闇になったとき、どうしようもなく体も声も震えた。
自分の視界をさえぎる大きな手に私は触れた。
たぶん自分の手も震えていたと思う。
「・・月を見るな・・俺がいるから闇を怖がるな。」
彪夜は私の視界をふさぎながら片腕で私の肩を抱き、自分に引き寄せる。
視界は真っ暗の闇。
なのにいきなり体に触れられて怖くない人がいるの・・・？
私は彪夜にそう問いたかった。
でも、彪夜が傍にいるから安心できた。
怖いという感情は消せなくても、安心することはできた。
「・・わかった・・もう・・見ないから・・てぇはなしてぇ」
彪夜に頼む。
「あぁ。悪かった・・・・！？」
彪夜は手から解放させてくれたがそのあと硬直した。

「？・・・・！？」

不思議に思ったが後からその理由が理解できた。

「・・追っ手が来てる。とりあえず移動しよう。」

彪夜は立ち上がる。

「！？やばい見つかった。」

彪夜は私を抱えて走り出す。

林を抜けて町の中へ。

追っ手が多くてなかなか撒けない。

私は彪夜に肩にかつがれながらも目くらましに後ろに光弾をぶちまけた。

太陽の力によって出した光弾はしばらく目くらましになってくれるだろう。

私は力を夜に使ったせいか急激に意識が遠のく。

「おい、由菜。しっかりしろ。意識を保て、あと少しでいいから。」

彪夜が走りながら私に言って曲がり角を曲がり、建物の上へと飛躍した。

そして屋根を飛び回り、追っ手を撒いた。

彪夜は槍の使い手ながらにして身体能力がとても長けていた。
皆には特別恐れられていたほどだった。

「撒いたな。」

彪夜はそう言って私を下ろす。

頭がくらくらする。

片手で頭を抑えながらも私は立ち上がる。

ふらつく体を彪夜が支えたときだった、ひょいっと顔を出して一人の少女が現れたのは。

「！？」

彪夜は驚き目を大きく開く。

私も驚いた。

「あなたは・・七夜月（ななよづき）様・・？」

私は少女に問いかける。

「そうよ、私、七夜月。私ね、今こっそり外に出てるのね、そしたらね、外が騒がしかったからね、つい出てきちゃったのよ。」

七夜月様はそう言って私たちのほうに近づいてくる。

彪夜は身構えた。
「そんなに身構えられては困るなぁ、私。そうだ、あなた、由菜姫でしょ？」
私に視線を向けて問いかけて来る。
「・・そう・・よ・・私・・由菜。」
私は正直に言った。
それは以前に面識があったからだった。
・・拍の婚約者としての対面だったけど。
「やっぱりね。ねぇ、由菜姫？私と手を組んで頂戴。」
七夜月様は突然すごいことを言い出した。
手を・・組む・・？
「・・もく・・てき・・・は・・？」
私は視界がだんだんぼやけていく中、声を搾り出して聞く。
「もくてき・・ねぇ。それは拍を取り戻したいからかな。
太陽華王国へ行ったきり戻ってこないのからずっと心配してたんだけど、
突然、あっちの跡継ぎがいないから僕が継ぐ　って言う知らせが来たからびっくりしてたの。
そうすると拍は私の婚約者ではなくなってしまうから困るの。

そのため・・かな？
だから、あなたたちをかくまってあげる。」

ついてきて　と後から七夜月様は付け足して私たちに言った。

私は歩こうとしたけど意識が朦朧としていてまともに歩けずバランスを崩して倒れる。

「おいっ」

彪夜が叫び、私を支える。

「・ひょう・・や・・七夜月様に・・・・ついて・・いって・・・・」

私は最後に彪夜にしっかりと伝えてそのまま意識を手放した。

そのあと、彪夜は七夜月様に仕方なくついていったことだけを記しておく。

第三話　月光華王国の姫（後書き）

少し更新が遅くなりました。
他の連載小説の方もあるので次回の更新も遅くなるかもしれません。
なるべく早くに更新しようと努力するので、見捨てないでください。

第四話　月の来訪者の家系に月はつきもの。

「・・ゆな・・・」

暗闇の中一人でいて、何者かに狙われて怖くてたまらなくなって
私は闇から逃れようと走っていた。

そんなときに聞こえたのが自分の名前だった。

怖い・・だれか・・たすけて・・・

自分が心の中で誰かを求めているときにさっきの声より大きくはっ
きりとした声で

「由菜っ！」

と、私の名を叫んでいる。

勘違いじゃない。
聞き間違えじゃない。

暗闇の中を走る私にとってそれはとても大きな希望の光だった。

まぶしい

闇の中に一条の光が私を照らした。

私はその光に導かれるように暗闇から脱出した。

「ん・・・・」

思わず目を開けるとぼんやりとした視界に移ったのは彪夜だった。

「由菜、大丈夫か？悪い夢でも見たのか？」

心配そうに私を見つめる彪夜が言う。

私は上半身を起こそうとした。

「急に起きると体に悪い。まだ寝てろ」

彪夜はそう言って私の腕や肩に触れた。

「・・だいじょうぶ・・」

私は彪夜の腕に触れ、ゆっくりと上半身を起こす。

視界がまだぼやけていてよく分からない。

「・・ここは・・？」

辺りを見回してぼやけた視界ではよく分からない。

ただいえるのは私はベットで寝かされていたということだけ。

「ここは月光華王国の姫の住む屋敷だ。もうすぐ姫が来ると思う。」

彪夜はそう言って私の額に手を当てる。

「ん？」

私は首をかしげる。

何で彪夜の手が私の額に？？

彪夜は緊張がほぐれたような表情になった。
そして私の額から手を放し私の頬に触れる。

「？」

私はされるがままだった。

「熱は・・下がったか。・・だが、虚ろな眼をしてる。ちゃんと見えてるか？」

私に顔を近づけ心配そうに見つめる。

「・・見えてるよ・・私・・熱があったの？」

私が彪夜の目を見つめて言うと

「あぁ。微熱だったが熱でうなされているように見えた。
夢、見てたか？」

彪夜は手を頬から放した。

「たぶん。あんまり覚えてないけど・・いい夢じゃなかった気がする。」

私はそう言った。

そのときだった、扉が開かれたのは。

「具合はどう？」

扉を開けて入ってきたのは月光華王国の姫、七夜月様だった。

「・・はい。だいぶよくなりました。」

私はそう言ってベットから出ようとしたが彪夜に止められた。

「無理するな。だいぶよくなったなんていえるほどじゃないぞ、そのふらつきようは。」

彪夜はそう言って私を止めようとする。

「で、でもっ。」

私はそれでもベットから這い出ようとしたからか、

「いいわ。そのままで。・・いすをここに持ってきて頂戴。」

七夜月様は私を制した後、侍従にいすを持ってくるよう命じた。

「はい、ただいまお持ちいたしました、七夜月様。」

「ありがとう。また用があるとき呼ぶわ。」

「はい。いつでもお申しくださいませ。では失礼を。」

侍従が持ってきたいすに七夜月様は座る。
侍従はその後すぐに部屋から退室して言った。

「じゃあ話すわよ。私たち月光華王国のことを。」

七夜月はそう言って話し出した。

「私の国は・・いや、私は月からやってきた異邦人なのよ。
その異邦人が作り上げた国が月光華王国。
月の光がもっとも光り輝く華のような王国、そういう意味を込めて
私の先祖は作り上げたの。」

七夜月様の説明に私と彪夜は目を見開いた。

「ぇ・・・と言うことはあなたは月の姫なのですね？」

私は思わず聞いてしまった。

「そうなるわね。そう、月からの来訪者である私の家系は特殊な力
を持っているの。
それが月の力。満月の日は格別力が強まるといっていたわ。
月から来て月の力を持っているからなのか私の家系は皆、名前に月
が必ずあるのよ。」

七夜月様はうんざりした口調で説明する。

「必ず、ですか・・・それまたなぜ・・？」
私は気になりだした問いを述べる。
「・・私のおばあ様が　私も勝手に月をつけられたからいいじゃない　と言ったの。
それが理由なんて悲しすぎでしょう？」
七夜月様は　もう嫌よ、こんな仕打ち。　と言いたげなな表情をしている。
・・たしかに。
そんな理由で月がつくなんて悲しいよね。
「はい。」
私も同情しながら頷く。
「だから私のお母様もお父様も名前に月がつくの。
お母様は蘭月。お父様は涼月。
ね？だから二人は私にもつけたのよ。
月の力は多少なりとも月と相性のいい波動を持っていれば使いこなせるの。
だから使える者はこの国じゃ高い位の貴族になってるわ。
私はね、月がついていない相手と結ばれたいの。
そして子供も月なんかつけたくないわ。
だから拍を王座から引き戻して欲しいのよ。」
「そうなんですか・・」

私は七夜月様の言葉を聞いて同情してしまった。

そして私は決意した。

お父様やお母様のいたあの場所を取り戻そう。

そして拍を・・拍を月光華王国に帰そう。

そうすれば七夜月様にも幸せが訪れるかもしれない。

私は今まで以上に強い思いがあふれてきた。

第五話　姫同士の契約

「お話中すみません。
姫様、明日の夜、拍様がお見えになるそうです。」
私が七夜月様と話していたときちょうど侍従がやってきた。
「あら、大変！では由菜姫、契約いたしましょう？」
「契約ですか？」
私は七夜月様の言葉に首をかしげた。
手を組むんじゃなくて契約を？？
「そうよ。
私からはあなたたちにあなたたちの望むものをあげる。
そしてあなたたちは拍を太陽華王国の王座から引き剥がす。
それが契約内容よ。」
七夜月様は言った。
「喜んでお受けします。」
私は微笑んだ。
「契約成立ですわね。
早速、望むものをおっしゃってくださいな。
早くしないと拍が帰ってきてしまうわ。」

七夜月様も微笑んで言う。
「はい、そうですね。
では、舞姫の衣装と音楽を奏でる楽器・・それと食料をお願いします。」
私が指折りで数えて言うと
「えぇ、いいわ。
それと多少なりとも衣服と金が必要よ。
それも用意させるから今はゆっくり休んで頂戴。
夕方にはここを出なければ拍の思う壺だわ。」
と、笑って言った。
「はい。」
私も頷いた。
彪夜は私と七夜月様の会話を静かに聞いていた。
「聞いていたわね？
早速今、姫が望んだものと私が言ったものを運んできて頂戴。」
七夜月様が侍従に命じてここを出て行った。
「・・・」
「・・・」

私は七夜月様が出て行ったほうを見ている。
彪夜は私をじっと見つめている。
「・・もう少し、寝てろ」
彪夜が言う。
「・・・。うん」
私はそう言って横になって目を閉じた。
「彪夜も・・一緒に寝て？」
私は小さい声で聞いてみる。
私はうっすら目を開けた。
視界に映るのは頬を赤く染めて私から目をそらす彪夜の姿。
「ねぇ、添い寝してよ。
昔はしてくれたよね？」
私は彪夜にせがんだ。
「っ～～～」
彪夜は顔を真っ赤にしていた。
私はそんな彪夜を引き寄せた。

「！？」

彪夜は声が出せぬまま私のなすがままになっている。

私は彪夜の背に抱きついて

「・・・。彪夜、休んでなかったでしょう？
だから彪夜も休んでね？
私にはもう頼る相手が彪夜しかいなくなっちゃったんだから・・」

と、言った。

それは嘘じゃない。
七夜月様は信頼できるけど彪夜ほど身近にいる存在じゃない。
だから私には彪夜だけ。

「・・・。あぁ」

彪夜は私を抱きしめ返してそう言った。

そしてしばらくすると彪夜の寝息が聞こえた。

私はその寝息に安堵して再び目を閉じて、眠ったのだった。

第六話　旅立ち

しばらく眠った後、夜明けに私たちは出発した。

今は月光華王国の国境である。

今から向かうは修練華王国。

目的地までは果てしなく遠い。

いくつもの国を超えてようやくたどり着くことができる国。

と、いっても一つ一つの国は小さい。

それほど大きな国ではない・・はず。

これから長く辛い旅になることは承知の上だった。

拍・・・・・。

今でも母や父が拍に殺されたことが信じられないでいる。

拍は昔からやさしくていい人だったのに。

一緒にいて楽しかったのに。

とても信頼していたのに・・。

拍が・・・拍の事が・・好きだったのに・・・。

その思いはいまだに捨てきれない。

あのときの拍は別人だった。
今までが幻だったのかと思えるくらい変わってしまった。
今でも心のどこかで拍のしたことを信じられないでいる。
拍を心のどこかで信じている。
拍・・・・・・。
「おい、由菜」
「・・・・」
「由菜っ」
彪夜に私は呼ばれた。
「！・・・えっ、な、なに??」
私は慌てて彪夜の方を向いた。
「拍のこと・・かんがえていたのか?」
彪夜は目つきを変えて聞く。
鋭い・・・
「・・・・」
私は俯いてやり過ごそうとした。

「・・・。拍のことは考えるな。」

彪夜は俯いた私を見て言う。

彪夜の言うとおりかもしれない。

これ以上彪夜を不愉快にさせないためにも、もうこの思いは封じよう。

私はコクンと頷いた。

それから無言で国境の境目を歩く。

「・・・・」

「・・・・」

二人並んで歩いているのになぜか切ない。

彪夜が遠くに感じる。

「・・ついた」

彪夜は呟いた。

私は目の前の光景を見た。

そこに広がるのは町並み。

とてもにぎやかな国だった。

街道には露店が並び、たくさんの人が行き来していた。

「ここが・・・文化の栄える国・・・開花王国。」

私は呟いた。

これが旅の始まりとも言えた。

「・・どうする？早速町で稼ぐ？」

私は町の豊かさに驚きながらも聞く。

「・・・・・」

彪夜は何も言わない。

楽器を弾きたくないからだろうか？

「・・・。とりあえず、宿探そう？」

私は言った。

「あぁ。」

彪夜は頷いた。

私は彪夜の手を握って街道を歩く。

そして宿を見つけた。

宿だと思うんだけど・・・

私は少し戸惑った。

それほど大きくはないし、異国の文字だけど・・。

私は一応この国の文字も学んだから分かるけど・・・

乱花の宿

ってどういう意味なんだろ？

らんばな・・？

「らんばなってよむんだよな？」

「・・うん・・たぶん」

彪夜の問いに私は頷いた。

「字の意味が気になるけど・・突っ立てても仕方ないし、入ろう？」

私は彪夜に言った。

「あぁ。」

彪夜も頷いた。

乱花・・・その意味は宿の扉を開けてから知ることになることを記しておく。

第六話　旅立ち（後書き）

少し遅くなりました。

第七話　『乱』が全てを狂わせる　1

扉を開いた瞬間、真っ先に目に入ったのは・・瓶だった。

そう、それを投げつけられたのだ。

「！！」

「！？」

ぐいっ！！

彪夜に腕を引っ張られ、それを何とか避けた。

そして、宿にいたものは皆、私たちのほうを見た。

「！・・・・・」

だがそれは一瞬のこと。

皆はすぐにまた争いを始めた。

争い・・・もとい乱闘・・それが宿の中で起こっているのだ。

「彪夜・・ありがと」

「まさか、入ってすぐに投げつけられるとは思ってもみなかった。」

彪夜は呟くように言う。

「・・うん・・」

私もちょっと戸惑いながら頷く。

乱闘はその後も続いたが私たちは巻き込まれなかった。

今の出来事でゆうゆうと宿の装飾をゆったり見れなかったが、今はそれを堪能できた。

壁全体が　花　のようで、きれいな装飾がなされている。

その　花　も独特な形をしていた。

まるで・・・なにかを囲むようにした形の豪華な花。

言葉では現せないほどの違和感。

何でそう感じるのかは分からない。

宿は一階、二階、三階、と分かれていて、一階は食堂と受付になっていた。

私たちは受付のほうへ行った。

受付の人・・・もとい、宿のオーナーがそこにはいた。

「いらっしゃい・・おや、珍しい。

異国の旅人かね？」

オーナーは目を見開いてたずねる。

「そんなものです。
ところで二部屋空いてますか？」

私は軽く受け流して尋ねる。

「あぁ、空いてるよ。
よくこんな一日中大騒ぎしている宿で泊まる気になれたね？
普通、扉を開けて何か投げつけられたらすぐにやめそうな気がする
んだがね」

オーナーは呟くようにして私に部屋の鍵をくれる。

鍵にも　花　が刻まれていた。

変わった形をしている。

この花・・・まるで・・華・・みたい。

私はまじまじとそれを見る。

「不思議な形ですね、」

私は呟くように言う。

「この宿は　ハナ　が有名だからね。
あ、そうそう、あんたらも気をつけたほうがいいよ、

この宿は　不思議な力　が宿ってるらしいから」

オーナーは言う。

「不思議な力？」

これは彪夜が尋ねた。

「そうさ、もう伝承に近い説にしかすぎないがね。」

オーナーは言った。

伝承・・何かこの宿には秘めている何かがあるのかも・・・・

「その伝承・・詳しく教えてくれませんか？」

私はオーナーを見据えて尋ねた。

「あぁ、もちろん、話してやるよ、短い伝承だけどね」

オーナーは大きく頷いてくれた。

第七話　『乱』が全てを狂わせる　１（後書き）

サブタイトルに合わない話となってしまいました。
これからがタイトルとのかかわりを持っていくので
どうか、見捨てないでください。

第八話　『乱花』の伝承

私はオーナーの話しを聞いた。

「昔、この地はね、他国の国境の間にあって、
戦があるとここで争っていたんだ。

ここで争いが行われる中、不思議な少女がこの地に降り立ったんだ。
少女は、この地に、青く美しい花を持ってきたんだ。
青は心を静める色なんだといって、この地に植えた。

植えた日以来、ここで戦はされなくなったんだ。
すると、その花は争いをなくした花・・平和を呼ぶ花　と、
言われるようになって誰もがたたえ、大切に育てた。」

オーナーはここで話を途絶えた。

「平和を呼ぶ花・・」

私は呟く。

「そう。でもある日、その花を引きちぎった奴が現れた。
この世に平和なんて訪れない・・そう叫んでそいつはさっていったそうだ。

それからだ、また戦が起こり始めたのは。

それから何年も戦は繰り広げられた。
だが、その戦もまたいつの日かぱったりとなくなる。

だから、皆は『乱花』・・乱れる花と呼び始めたんだ。
一時の平和を味わい、一時の戦を味わい、時が過ぎればまた平和が・・
そんな不安定な平和は人の心を乱す。
それが乱花の由来だろうね。」
オーナーはどこか遠くを見るような瞳で言った。
「不思議な力が宿ってるっていったのは、
ちょうど、この宿が立ってるところにその乱花が植えてあったから
らしいんだよ」
と、付け加えるようにオーナーが言った。
「そうなんですか・・・。
お話してくださってありがとうございます。
なんだか・・納得しました。」
私が言うと、
「こちらこそ、きいてもらえてよかったよ。
じゃあ、そろそろ、部屋に行きな。
これからまた騒ぎ出すと思うから」
と、私たちに　いったいった　と、手を振った。
「はい、お言葉に甘えて」

私はペコットお辞儀をして二階に上がった。
彪夜も私を追って二階に上がる。
そして部屋の鍵と同じ華のある部屋に向かう。
ガチャ
部屋は空いた。
「はい、こっちが彪夜の部屋のやつ」
わたしは、彪夜に鍵を渡した。
「あぁ」
「じゃあ、荷物の整理したらどっちかが呼ぶって事でいい？」
「あぁ。」
私は彪夜が頷くのを見て部屋に入った。
そして開けたドアを閉める。
私は部屋の中を見渡した。
部屋の模様はすごくきれいで、花の模様が華やかに描かれている。
私はそれに見とれていた。

すると、部屋が一瞬歪んだように見えた。

グニャ

ゆがみを音で現すにはこんな音だっただろう。

歪んだ景色を見ていると頭痛もしてきてめまいがした。

いや、部屋が歪んだんじゃなくて視界が歪んだのだと思う。

バタ

気がつくと私は床に倒れていた。

意識が朦朧とする。

ガタン！！

私が倒れた音を聞きつけたのか、すぐに彪夜がドアを開けて、駆け寄ってきた。

「由菜！！」

彪夜は私を抱き起こし揺さぶった。

「おいッ！しっかりしろッ！由菜！！由菜っ・・・・」

彪夜は私の名を叫び体を揺さぶった。

だが、私の異変に気づき、手を止めた。
今の私の瞳は彪夜は映っていなかった。
青い華だけが視界をぐるぐると回っていた。
それに惑わされ、息をするのも忘れていた。
「おいっ！？ゆなっ！息をしろ、息をッ！！」
彪夜は私の背中をたたく。
何度もたたかれ揺さぶられ、ようやく・・・・
ヒュッ
という、空気の吸い込む音がでる。
ヒュッ・・・ヒュッ・・ヒュー・・ヒュー
深く単発的な呼吸が彪夜の耳には届いた。
過呼吸・・彪夜の脳裏にその文字がよぎった。
「由菜っ、しっかりしろっ」
彪夜は叫ぶ。
由菜は・・
なぜ、こうも苦しいのか、なぜ、彪夜がこれほど焦っているのかが

分からなかった。

ヒュッ・・・・・

由菜の音を立てる呼吸がやんだ。

「おいっ、ゆなっ！！ゆなっ」

彪夜は焦り、体を揺さぶる。

このとき、由菜は恐ろしい映像を見ていた。

青い花が赤く染まり、その花がいくつも重なり、華と化していた。

その華が由菜をあざ笑うかのようにぐるぐると回り、由菜を苦しめた。

昔、由菜は親からも見放された時期があった。

その当時は花を愛でていた。

だが、その花が枯れ、無残な姿となった。

枯れたのは故意に誰かがやったものだ。

その誰かを由菜は知っている。

それが太陽の力・・太陽の力で具現化した魔物

それが、悪魔の華。

だから、青い乱花が悪魔の華に見えた。

それを嫌悪していた。

由菜の心は幻覚で狂わされていた。

「おいっ！！由菜っ！！しっかりしろっ！！」

彪夜の声が遠くで聞こえた気がした。

その声に安堵したせいか、由菜は意識を失った。

第九話　『花の呪い』

「ん・・・」

「由菜・・意識を取り戻したか？」

私が目を開けるとそこには彪夜の姿があった。

私は辺りを見回した。

「ん、どうした？」

彪夜はタオルをぬらしながら聞く。

「いま・・・よる？」

私は聞いた。

私は窓のカーテンの隙間から見える暗闇を見て思った。

「あぁ・・・。」

彪夜は頷いた。

「由菜・・お前、何か見たのか？」

彪夜が私の目を見ながら聞いてきた。

・・なんでそんな深刻な表情を・・・

「え・・、なんできくの？」

私は聞き返した。

彪夜の表情がいつになく真剣で私を見つめてきたからだ。

「・・。」

彪夜は私にすっと手を伸ばした。

「！・・・・」

私は思わずびくっとする。

「・・・・・」

私は戸惑いながら彪夜を見る。

「由菜の瞳・・華のような文様が見える・・。」

彪夜は言った。

「え・・」

・・華っ！！？

彪夜は私の頬をなでた。

「気を失う前に、何か、青い華を見なかったか？」

彪夜は聞いてきた。
それを聞いて私は思い出した。
・・・そうかっ
「うん・・見えた・・それでなんだか苦しくなって・・それで・・」
私は思い出しながら言った。
「・・オーナーが言ってた。
由菜の瞳の色と華が刻まれたのは『花の呪い』らしい」
彪夜は言った。
「え・・『花の呪い』！？」
私は声を荒げた。
そしてガバッと上半身を起こす。
花の呪い・・それは太陽華王国にも伝わる有名なマジナイだった。
「そうだ。
由菜が気を失ったのはそのマジナイをかけられたせいだろう。
知ってるだろ？
『花の呪い』のことは」
彪夜は言った。

「うん・・知ってる。
それは、花に命を芽吹かせた、花言葉を呪文として用いることができる種族が
自分とは違うものに訴えとしてかけることができて・・
それを『花の呪い』って言うんでしょ？」

私は確認の意味で聞いた。

そう、花の呪い　というより、訴えるマジナイ　なんだ。

「あぁ、そうだ。
由菜は知ってるか？
マジナイはまじないをかけた人物の願いを聞くことで解かれることを。」

彪夜は私に聞いた。

・・願い・・聞く・・・

「うん。
・・・。
ぇ・・だからって・・・今いない・・その人を・・」

私は戸惑う。

・・だって、このマジナイは昔の人のものでしょう？
それで解けるのかな？

「由菜にかけた首謀者は今はいない。

今いないそいつを探しても意味ないだろうが・・
そいつの生まれ変わりはいるらしい」

彪夜は言った。

「え・・、っていうことはその人を探せば・・マジナイは・・解かれるっってことっ？」

私は目を輝かせて言う。

「そういうことだ。
オーナーにそいつの場所は聞いた。
だからいつでもいけるが・・。
それより、太陽の力・・変わりないか？」

彪夜は心配そうにたずねる。

「えっ、あ、・・うん、なんともない。」

私がそう答えると、

「なら、いい」

と、安心したように言って私の頭に手をおいた。

ゆっくりとその手が私の頭を撫でる。

「今日は遅いから寝ろ。
俺も寝るからな、行くのは明日だ」

彪夜は立ち上がって言った。
するりと私の頭から手が離れてく。
ぐいっ
思わずその手を私はつかんでしまった。
「ん？」
「・・ありがとね、彪夜。
私・・彪夜があの時いなければ・・もっと苦しんでた・・。
彪夜がいてくれたから・・安心することができたの・・。
ほんとに・・ありがとね」
私は目を伏せながら言った。
自分でも何を言ってるのか分からないけど、とっさに出たのは本心からの言葉だった。
「っ～～。あ、あぁ。
ムリするなよ　っ～～」
彪夜は硬直しているらしく言葉が突っかかってた。
・・うれしかったのかな？
うぬぼれすぎとか思うかもしれないけど
私は彪夜に大切にされているって大事に思われてるって思うときは幾度かあった。

だから今回もそうかなって思ってしまった。
彪夜はつかまれた手でもう一度私の頭を撫でて去っていったのだった。
「・・うん」
私は後姿を見送りながら頷いた。
そして、近くにある鏡で自分の瞳を見た。
「・・ほんとだ・・両目の色と模様が・・」
思わず呟くほどの変わりようであった。
その瞳をじっくり見ようと前かがみになると・・
『私のマジナイをかけることができたあなた』
と、頭に直接声が響いてきた。
「え？」
・・かけることができたって・・どういうこと？
『あなたにはあなたにしかできないことがあるから
・・私のマジナイは・・私の願いは直接あなたにいえないけど・・』
頭に直接来る声はまだ続いた。

・・直接って・・じゃあ、まじないをかけた人ってこと??

『でも、私の願いから程遠くない願いを
私を前世に選んだあの子があなたに願うでしょう。
どうか、拒まないであげてね、あなたのこれから行く未来に役立つはずだから・・』

頭に直接聞こえる声はそこでパタッと消えた。

前世に選んだって・・選べるものぉ!?

私は突っ込みたいことがいくつかあった。

いや、それよりも・・

「・・かけられたまじないは解くのが礼儀・・でしょう」

私は思わず呟いた。

それは両親からの受け売りだった。

マジナイは相手を縛るものでもあるけれど、相手を解放すものでもあって
自分を幸せにするものでもあるといっていた。

かけられる相手はゴクわずかしかいない中で
かけられた人は幸運といってもいいぐらいなのだと。

そしてかけた相手にもかけられた相手も幸せへの第一歩なのだと。

だから、かけられたら願いをかなえてやれと言われたのだった。

そして自分自身もそう思うからこその言葉でもあった。

私はそう思いながらベットに入りそのまますやすや眠ったのだった。

第九話　『花の呪い』（後書き）

長い間書いていなくてすみませんでした。

第十一話　生まれ変わり（前書き）

途中から過去編に変わります。
ごちゃ混ぜにならぬよう頑張りますので
ご了承ください。

第十一話　生まれ変わり

翌朝、私と彪夜は私にマジナイをかけた人の後世に会うため、開花王国の国境ふもとにある森へ入った。

「うわぁっこの森、きれいだね～」

私は歩きながら言った。

森にはしっかりと道ができていた。

その道を歩くたびに呟いてしまうほどの光景がいくつも見ることができた。

日光が木漏れ日を映し出し、風が木の葉の音をかもし出し、花は揺れ動く。

色とりどりの花が道沿いにきらめくこの森はまさに開花王国の象徴と言ってもいいだろう。

「あぁ。・・・

そろそろ、道沿いから離れる。

場所は川の近く、らしいからな」

彪夜は言った。

「うん」

私は頷く。

そして二人は道沿いから外れた。
道沿いには足元をおぼつかせるものはないが、
今ではもう、足元には雑草やら花やら、木の根やら・・とたくさんあった。

注意していかなければならない。
しばらく道なき道を歩くと、足元の雑草が横に倒れているのを発見した。

「彪夜っ、ここ、誰か通ったみたい。」

私は足元を指差して言った。

「・・あぁ、追っていくうちにはっきりと残っているのがわかる。もうすぐだな」

彪夜はおちついた物腰で言った。

どうやら私より先に気づいていたらしい。

・・だったら私にも言ってよぉーっ

そしてその踏み草の跡を追っていくと

「あなたたち、だぁれ？」

と、正面からやってきた人は言った。

その人・・その子は幼く、ゆったりとした着物を着ていた。

「！」

あっ、この声夜に聞いたッ、きっと、この子だ！！

「あ、あの、私、『花の呪い』にかけられたんだけど・・・かけた人の後世がここにいるって伺ったんだけど・・」

私はしどろもどろに言った。

「ぁ・・・うん・・・。

私だよ。乱花を植えにきた人の記憶もってるから。

あ、私、風香（フウカ）っていうの」

彼女はそう言った。

どうやら、すぐに理解してくれたらしい。

私の目を見て、その人は確信したのだろう。

「私、由菜っていうの。

で、こっちはーーー」

「彪夜だ」

私の声をさえぎり、彪夜は言った。

「それでね、私たち、君の願いをかなえにやってきたんだ。

だからかなえさせてくれるかな？」
私は風香にきいた。
風香の背丈は私の胸ぐらい。
だから彪夜とは背丈の半分ってところかな。
「うん、いいよ、私、叶えて欲しくてずっと待ってたから。
じゃあ、まず、家に案内するね」
風香は言って、こっちこっちとばかりに私の手を引っ張って歩き出す。
あわわぁっぁ
私がちょっ・・ちょっと・・はやっい・・・ってな感じで転ばないように頑張っているところを
なぜか彪夜がクスクス小さく笑っていた。
「あっあぁーーひょっーーーひょうやっ！
わらわっ・・ないでよっ」
私が何度か足がもつれそうになりながらも彪夜に叫んだ。
「あ、あぁー悪い。・・クスクス」
謝りながらも彪夜は小さく笑っていた。
「あ、ついたよっ、ここが私の家」

風香は小さく笑って言った。

家の周りだけ木がなく川原見たいな石が地面にあって
家から少し降りていくと、川があるかのように川のせせらぎが聞こえた。

「風香ちゃんって何人暮らしなの？」

私は聞いた。

大きさからすると四人くらいなのだが・・・。

「二人だよ。
私の双子の弟がいるの」

風香は少し沈んだ顔をした。

・・・双子のーーー

それを言葉に出そうとしたとき、家から誰かが出てきた。

「ぁ・・」

その子は小さく目を見開く。

「こんにちは」

私はにっこり微笑んで挨拶した。

「・・どうも・・」

その子は私から目をそらしていった。
「俊(シュン)っ、ただいま。
あ、こちらは私のお客様。
お泊りさせてもいいでしょ？」
風香はそう言ってその子に聞いた。
「・・・・。
僕、魚釣ってくる」
その子は風香の問いには答えず、そういい残して去っていった。
「・・・。
あーぁ、やっぱり俊は人嫌いなのかなぁ・・・」
風香はその子の後姿を見て呟いた。
「あの子が、双子の弟？」
私は聞いた。
「うん、名前は俊っていうの。
誰とでもあんな感じで・・・。
私に対しても親しくはしてこないの・・・。」
風香の声は沈んでいた。
「・・じゃあ、中に入って。

お願い事、かなえてもらうにはやっぱりたくさん話さなきゃいけないから」

風香は言った。

「ありがとう。
さっき、お客様って言ってくれたけど・・。
ほんとうにいいの？泊まらせてもらっても・・」

私は聞いた。

「うん、もちろんっ。
この辺他に住んでる人いないから。
それにいてもらわないとっ！
俊は四六時中顔あわせてないとたぶん警戒するから・・」

風香はそう言って家の扉を開けた。

「ありがとう、風香ちゃん」

私は言った。

「エへへ、そういえば、由菜姉（ゆなねぇ）と彪夜兄（ひょうやにぃ）は旅人なの？」

風香は家に上がり私たちを中に入れてくれた。

ちいさく私はお邪魔しますといってあがった。

「んー、そんな感じかな」

私は曖昧に言った。
従兄妹が両親を殺して、追われているなんて答えられないーー！！
そして、部屋の中は和風で畳とか和室があった。
そしてリビングでテーブルを三人で囲み、風香が話し始めた。
「えと、ね、まずは・・両親の話からかな。」
そういって風香は幼い頃のことを語った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー風香編

私の家族は四人家族だった。
双子の俊に両親で私。
両親は私たちをいつも怒った。
ほめられたことなんて一切なかった。
だから嫌いだったし、心も耐えられそうになかった。
でも、俊がいたから心の支えになれて頑張れた。
私の母はいつも薬草を私に教えた。
そのとき私は前世の記憶を取り戻した。

自分が乱花をこの国に植えに来たのだということを。
そして薬草を覚えると摘みに行かされた。
「見つかるまで探しなさい。」
と、きついいいつけで、その日も夜遅くまで探した。
・・今日もおかあさんに怒られる・・・
しょんぼりして家に帰った。
「ただいま・・おかあさん、ごめんなさい・・みつからな・・・・ーーーー！！！？」
私は家に入りいつもお母さんのいる部屋に入った。
すると、私はそこでいけないものを見てしまった！！
お父さんは近くで倒れて血だらけで、
お母さんは俊の手によって体を貫かれている真っ最中だった。
俊は狂ったような目をしていて手には小刀を握っていた。
俊も返り血を浴びてとても悲惨な姿になっていた。
・・しゅ・・しゅんっ・・・
「しゅっ・ーーー！！？」

ドンッ

俊は私を見るなり私を押し倒した。

私はたたみの上に俊の下敷きとなってしまった。

「ーーー！！」

抵抗する気は一ミリともなかった。

俊に殺されるならまぁいいかとおもってしまったのと、

親の死より、双子の弟である俊が殺したことに驚いたからだった。

でも、今の俊はあまりにも異常だった・

俊の小刀の握る右手が振りあがった。

「！！・・しゅっ・・ん・・・・・」

私は最後に俊の名を呼んだ。

そして今までの俊のことを振り返る。

・・・そういえば・・このごろ俊はおかしかった。

・・・どんどん口数は少なくなっていったし、

・・怒ることも・・泣くことも・・なくなった・・

・・俊・・私は・・助けられるばかりだった。

・・俊を・・私は助けることが・・できなかった

・・・ごめん・・ね・・・しゅん・・っ

私は俊を想いながら泣き、そして俊を見つめた。

「っーーー〜〜！！」

俊は右手を振り下ろした。

私は思いっきり目をつぶった。

コロサレルッ！！

ガッ！！

そんな音が耳元でした。

恐る恐る目を開けるとそこには・・・手を震わせた俊がそこにいた。

俊は・・私を殺さなかったのだ。

しゅ・・・ん？

「っ〜〜〜」

俊は小刀を放した。

小刀はたたみに突き刺さったままだ。

私は震える俊の頬に手を伸ばした。

「しゅ・・ん・・っ・・」

俊は涙を流していた。
私も一緒に涙を流す。
しゅ・・ん・・戻ってきた・・わ・・わたしのしゅ・・んっ・・が・・
私は俊に触れた。
俊は一瞬目を見開き、私を見た。
「・・フ・・ウ・・カ・・・っ」
俊は言った。
苦しそうに顔をゆがめながら、
そして私の手を自分の手で触れた。
両親を殺した、その手で。
私は両親がいなくていいと思った。
俊にそこまでさせるほど、親はいつも俊に負担をかけさせてたんだから。
親より俊が心の支えだ。
「しゅっ・・・んっ・・・・」
私は俊を抱きしめた。

俊は私の腕の中で泣いてくれた。

そして力強く私を抱きしめ返してくれた。

・・しゅ・・んっ・・・もう・・苦しませないから・・

・・私が・・傍に・・・いるからっ・・・

俊が泣きつかれて眠った後、

私は両親のなきがらを家から追い出し、野獣がいるといわれる住みか周辺においてきた。

そして、家の中を掃除した。

そして、両親が死んだあの部屋は一切使わないように封印した。

俊が目覚めたのは翌朝のことだった。

俊は両親を殺したことは覚えていた。

だが、どうやったのかはわからないといった。

私は思った。

きっと、俊の中には前世がいるんだ、と。

そして、俊は気づいていないということを。

俊の前世は・・間違いなく乱花を引きちぎった人なのだと。

それから二人は、森にある食べ物で生活していった。

俊は親のことがあるせいか、
人見知りが激しく、買い物にはすべて私が行くことになった。
俊の口数が少ないのは両親のことがキッカケだったらしく、
最低限のことしかしゃべらなくなった。

それで、私は森で乱花を見るたびに祈った。

どうか、俊が救われますように。

元に戻りますように、と。

俊の中にある心の負担を除きたい、もう二度とこんなことがないように・・と祈った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーー

「っていうことなの、だから・・
私の願いは俊の心の重荷を取り除くこと。
そうすればもう前世は出て来れないはずだから」

風香は言った。

私は思った。

・・前世・・双子たちの前世は・・

風香の前世は・・こういうことを願ってたのね・・。

あの乱花を引きちぎった人を救って欲しい・・まさにこういうことだったのね。

私はそれで両親がいないのかと納得したし、

両親が射なくてもいいと思えるこの子たちがかわいそうに思えた。

・・愛を知らない子・・それがこの子達なんだね・・・。

「ありがとう、

思い出したくもない話を・・聞かせてくれてほんとうにありがとね」

私は涙ぐみながら言った。

「由菜姉・・泣いてくれるの・・？

ありがとう・・・聞いてくれて・・ありがとう」

風香も泣いてくれた。

私ももらい泣きしたかのように泣いてしまった。

「・・・」

彪夜は黙ったままである。

たまに表情を変えたが・・。

私は・・俊君に話しに行こうかなと思い始めたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2087n/

太陽と月と踊る舞姫

2010年11月27日13時09分発行